

海外旅行での薬剤耐性菌に注意

感染症に国境はない! 海外における薬の服用で薬剤耐性菌が国内へ流入?!
気を付けるべき感染症の予防対策とは?

調査レポート発表

新型コロナウイルスの流行が世界で問題となっている今、改めて感染症に国境はないことが認識されています。コロナウイルスには今のところ評価の定まった治療薬はありませんが、細菌による感染症の治療には抗菌薬が切り札として使われてきました。その抗菌薬が効かない薬剤耐性(AMR)の問題が世界中で深刻化しており、日本でも新たな薬剤耐性菌を増やさない、拡散させないように取り組みが行われています。一方、海外で薬剤耐性菌に感染し、自覚がないまま日本へ持ち込んでしまうケースが懸念されています。そこで、AMR臨床リファレンスセンターでは、海外渡航経験のある20代以上の男女293人を対象に海外旅行と抗菌薬についてアンケート調査を行いました。その結果、現地での抗菌薬の購入経験は、20代の男性で約3割はあると答えています。海外旅行において、自己判断による抗菌薬の使用は、薬剤耐性菌の日本への流入につながります。

感染症に国境はありません。恐ろしい薬剤耐性菌を日本に持ち込むことがないように、抗菌薬を服用するデメリットを知り、海外からの薬剤耐性菌の流入を防ぐように一人ひとりが実践することが大切です。

調査 SUMMARY <サマリー>

- 海外旅行先で
抗菌薬(抗生物質)を購入したことがある人は1割
そのうち 20代男性では約3割も!
- 約8割 が、海外旅行前に
トラベルクリニックを受診したことがない



サンプル: 一般人 406名 男女 各50%、20代~60年代別に調査

- 海外旅行で 抗菌薬 を服用するデメリットがあることを知る
- 海外旅行中、前後で行う薬剤耐性菌対策8か条

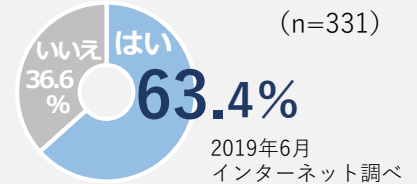
* アンケート調査は2020年1月中旬に、忽那医師のインタビューは2月3日に実施しました。

海外旅行先での薬剤耐性菌の感染に注意

国立研究開発法人 国立国際医療研究センター国際感染症センター 忽那賢志(くつなさとし)先生は、海外旅行者による海外の薬剤耐性菌の国内流入に警鐘を鳴らしています。先生によると、途上国に多くみられるESBL産生菌などの薬剤耐性菌の国内への持ち込み事例が、近年増えているそうです。この菌は、膀胱炎、腎盂腎炎、肺炎などの原因となることがあります。薬が効かない薬剤耐性菌のため、国内で他の人に広がることも脅威となります。そこで海外の薬剤耐性菌を国内に持ち込まないためには、どのような対策を行ったらよいか伺いました。

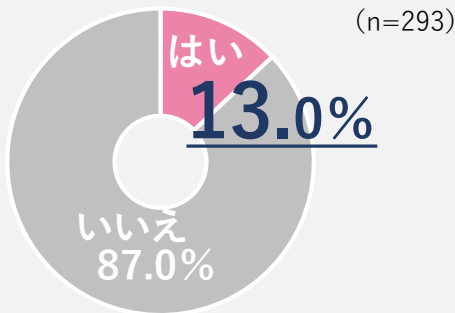
薬剤耐性菌は、食物を通じて体に入ったり、抗菌薬を自己判断で飲むことをきっかけに体内で増えていきます。下痢などの症状を抑えようとして持参した、または現地で購入した抗菌薬を自己判断で服用しているものと思われます。先行調査では東南アジア、南アジアへ旅行経験がある人の63%が、下痢や腹痛などの旅行者下痢症を起こしていました。「抗菌薬は万能薬」といった間違った認識から自己判断で抗菌薬を飲み、その結果、自覚がないまま薬剤耐性菌を海外から日本へ持ち込んでしまうのです。

(参考) 海外旅行先で下痢、腹痛になったことはありますか？

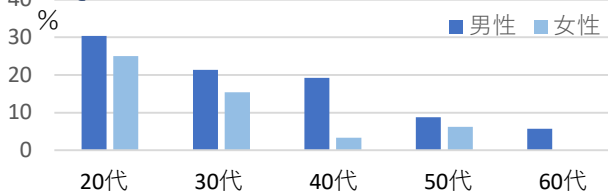


海外旅行先で抗菌薬を購入したことがあるのは1割

Q1 海外渡航先で抗菌薬(抗生物質)を購入したことがありますか？



Q1で「はい」と答えた人の年代別グラフ



「海外渡航先で抗菌薬(抗生物質)を購入したことがありますか？」という質問に、13%が購入経験があると答えました。特に20代男性では3割にのぼりました。途上国を中心に抗菌薬を薬局で買える国が存在します。抗菌薬は自己判断で服用すると薬剤耐性菌の国内持ち込みにつながるリスクがあります。(次頁 1.、画像参照)

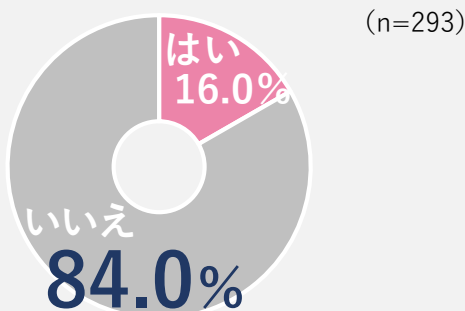
本当に抗菌薬が必要かどうかは自己判断ではなく、医師の判断に従うことが重要です。例えば、軽い下痢であれば抗菌薬を飲む必要がないことも多く、むしろ抗菌薬を飲むことで、海外の薬剤耐性菌を日本に持って帰ってしまう可能性が高くなります。

諸外国では日本人に対応したクリニックも存在します。旅行用の保険を活用するのも一法でしょう。

忽那先生の話によると、具合が悪く病院にかかる時は、海外渡航歴について医師に伝えてほしいそうです。渡航歴に合わせて診断を検討したり、薬剤耐性菌の保菌を推定するなど正しい診断に関わる重要な要素となるからです。

約8割がトラベルクリニックを利用したことがない

Q2 海外渡航前に感染症の予防目的でトラベルクリニックなどの病院を受診したことがありますか？



海外での感染症を予防するための専門機関として「トラベルクリニック」があります。しかし「海外渡航前に感染症の予防目的でトラベルクリニックなどの病院を受診したことがありますか？」という質問には、わずか16%しか「はい」と答えませんでした。

ワクチンを接種しないと入国できない国もあり、事前のチェック、また、自分の抗体の状態を知ることも重要です。幼少、学童期に定期予防接種を受けそびれて抗体がないこともあります。また自己判断で抗菌薬を飲まないよう、医師の指示を受けることも大切です。なお、ワクチン接種を考慮すると、渡航の4週間前に受診するのがベストです。

海外旅行で抗菌薬(抗生物質)を服用するデメリット

1. 薬剤耐性菌が体内に残り、腸内で増殖し国内へ持ち込むことになる

身体に有益な菌も死に、現地で体内に入った抗菌薬が効かない薬剤耐性菌だけが残り、腸内で増殖。身体の中に持ったまま日本へ持ち込む可能性が高くなる。

2. マラリアや腸チフスなど命にかかわる感染症の診断と治療が遅れる

旅行者下痢症でない下痢の場合、抗菌薬を服用することでかえって診断や治療が遅れることがある。特にマラリアや腸チフスの場合、命にかかわることもある。

3. 抗菌薬の服用による下痢と区別がつかなくなる

抗菌薬を服用すると腸内細菌のバランスが崩れて下痢が起こることもあり熱が出たからと抗菌薬を自己判断で服用すると、他の原因の下痢症と判断がつかなくなる。



海外旅行で流入するAMR(薬剤耐性)菌が増加！

■ 薬剤耐性 (AMR) とは？

現在、薬剤耐性のことを世界的にAMR (Antimicrobial Resistance)と呼んでいます。細菌などの微生物が増えるのを抑えたり殺したりする薬が抗菌薬(抗生物質)ですが、微生物はさまざまな手段で薬から逃げ延びようとします。その結果、薬が微生物に対して効かなくなることを「薬剤耐性」といいます。抗菌薬が使用されると、その薬が効く菌が減少しAMRをもった菌が生き残るため、体内で増殖し、人や動物、環境を通じて世間に広がります。抗菌薬は大切な薬ですが、適切に使用することが重要です。

■ 国連も「2050年にはAMRで年1000万人が死亡する事態」と警告

国連は、このままでは2050年までにはAMRによって年に1000万人が死亡する事態となり、がんによる死亡者数を超え、08～09年の金融危機に匹敵する破壊的ダメージを受けるおそれがあると警告しました*1。

海外から持ち込まれるAMRで、現在事例が増えているESBL産生菌(薬剤耐性菌の一種)は大腸菌など腸内細菌の仲間なので、腸内にいても自分自身には症状はありません。楽しく旅行から帰ってきたものの、気が付かないうちに日本国内へAMRを持ち込んでいることになってしまいます。

*1 <https://news.un.org/en/story/2019/04/1037471>
No Time to Wait: Securing the future from drug-resistant infections
Report to the Secretary-General of the United Nations April 2019

■ 切り札といわれる抗菌薬が効かない菌も海外から

切り札といわれるカルバペネム系抗菌薬に対する耐性菌も、海外からの持ち込みが報告され問題となっっています。腸チフスなど命にかかわる病気の耐性菌も報告があり、海外旅行でのAMR対策は喫緊の課題とされています。日本にまだ入っていない耐性菌も海外では、数々報告されています。

薬剤耐性菌による感染症は、治療が困難になったり治療期間が長くなる原因となります。旅行者下痢症にいつも抗菌薬が必要なわけではありません。海外で感染しないよう対策を行うことはさらに重要です。

海外旅行中、前後で行う薬剤耐性菌対策 8か条

旅行前

1. 旅行前に入国に必要なワクチンを「FORTH (厚生労働省検疫所)」などで調べる
2. トラベルクリニックなどで、抗体検査や必要なワクチン接種を行う
3. 旅行に行く前に、保険に入っておく (現地の病院の紹介や、医療費負担軽減のため)

旅行中

4. 現地で、日本語対応など、かかりやすい病院を調べておく
5. 旅行中は抗菌薬を自己判断で飲まない、買わない
6. 旅行中に具合が悪くなったら、現地の病院 (できれば日本人向け) を受診する

旅行後

7. 旅行後に医療機関にかかる時は、過去1年にさかのぼり海外渡航歴を医師に伝える
8. 過去1年、海外で入院歴があったら医師に伝える

くつな さとし
忽那 賢志 先生

医師

国立研究開発法人 国立国際医療研究センター 国際感染症センター
国際感染症対策室 医長 国際診療部 副部長 (併任)
国立国際医療研究センター 国際感染症センターに2012年より勤務
海外から持ち込まれる感染症、エボラ出血熱などの新興再興感染症、
デング熱などの動物由来感染症を専門にしている。

